

〈研究ノート〉

思春期, 青年期の親準備性に及ぼす乳児保育学習の検討

前 田 隆 子・井 田 史 子・鈴 立 恭 子

Takako MAEDA, Fumiko IDA, Kyoko SUZUTATE :

A Study of Childcare Lectures for Readiness on Parenthood in Adolescent

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第74号 抜刷

2017年1月

〈研究ノート〉

思春期、青年期の親準備性に及ぼす乳児保育学習の検討

前田 隆子¹・井田 史子¹・鈴木 恭子¹

Takako MAEDA, Fumiko IDA, Kyoko SUZUTATE :

A Study of Childcare Lectures for Readiness on Parenthood in Adolescent

強い慢性的な育児不安を抱く親に、子どもの激しい泣き声等のストレスが加わると怒り、激高し、体罰に及ぶ恐れが潜在している。本研究では、若者がその当たり前のことを理解し、保育技術を学習することの親準備性に及ぼす効果について検討することを目的とする。学習内容と方法：対象は男子、高校3年生と大学1年生21名で、対照群との2群を設定した。学習は、乳幼児は泣いて欲求を表現することを中心に映像を用いて解説し、保育技術の説明と体験を計30分間行った。泣き声を3分間流し、その前後で①対児感情、および親準備性等を質問紙調査、②ストレスを唾液アミラーゼで測定した。結果：先に乳児の泣きについての知識と世話の方法を修得した群で、対児感情の回避点が、泣き声を聞く前に比べ後で有意に低かった。学習によって、泣きによるストレスが少なくなる傾向が示唆された。

キーワード：思春期・青年期 親準備性 乳児保育学習

はじめに

子育て中の親を対象に育児不安を調査すると、一見普通の家族であっても強い不安を訴える親が多くみられる。思春期、青年期において親から手厚い世話を受ける存在であった若者が、心構えもなく親になると、世話をする立場になってとまどい、育児不安の強い状況となることが考えられる。

強い慢性的な育児不安を抱く親が、子どもが言うことを聞かないこと、激しく泣くこと等のストレスが加わることで、怒り、激高すると体罰に及ぶ恐れがある。育児不安の強いものには虐待の恐れが潜在していると考えられる。子どもは、泣くことで甘え、空腹、不快を伝えるので、泣くのは当たり前のことであり、親になれば24時間いつでも対応できなけ

ればならない。親になる資質には子どもとの接触体験が影響していると報告¹⁾した。しかし、子どもとの接触体験には時間と場が必要である。

本研究では、若者に、短時間の子ども理解と保育技術体験プログラムを実施し、親になる心構え、親になる資質、即ち親準備性への影響を調べ、将来親になる世代での親準備対策について検討することを目的とする。

1. 方法

(1) 対児感情、親準備性等調査

①対児感情、および親準備性等質問紙調査

質問紙は対児感情²⁾、親性準備性³⁾を参考に作成した。対児感情は「あたたかい」など14語による接近項目と「やかましい」など14語による回避項目を、選択肢「非常にその通り」～「そんなことはない」4段階で尋ね、3～0で評点した。親性準備性

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

は「育児は素晴らしい仕事だ」など22項目を「当てはまらない」～「当てはまる」5段階の選択肢で回答を求め、0～4で評点した。

②ストレス測定

ストレスの生体反応を唾液アミラーゼで測定した。唾液アミラーゼ測定はニプロ乾式臨床化学分析装置唾液アミラーゼモニターを使用し、舌下で30秒間反応させた。

(2) 学習内容と方法

学習内容：1部では乳児の生活、乳幼児は泣いて欲求を表現することを中心に映像を用いて、解説した。2部では哺乳、おむつ交換、抱き方などの保育技術の説明と体験を行った。学習は合計30分間行った。

その効果をみるために対照群を設定し、学習前に泣きを体験した場合（A群）と知識と技術を修得後に泣き声を聞いた場合（B群）で比較した（図1）。

A群とB群は当日の受付でくじをして決めた。泣き声は3分間でその前後で①、②を調査した。

対象：高校生、大学生を対象とし、高校生では、高校の許可を得て、全校生と保護者に依頼文と同意書を配布し、同意書の提出のあった高校3年男子生徒10名、大学生では募集で集まった大学生11名で実施した。実施日は高校生の平成28年1月27日と大学生の5月26日であった。

対象者は、高校3年生男子10名（年齢17～18才）と大学生11名（年齢18才）、合計21名で、内13名が年下の弟妹を有した。また、幼い子どもと遊んだ経験は全員にあり、頻回が13名、数回が8名という状況で、中には弟妹の世話体験を有する者もあった。

乳児は泣くことで甘え、空腹、不快を伝えるので、泣くのは当たり前であり、24時間いつでも対応が必要であることを、映像を用いて解説した。加えて乳児の世話ができる最低限の技術としてミルクの調乳、授乳、排気、おむつ交換、抱き方を全員が人形で体験した。

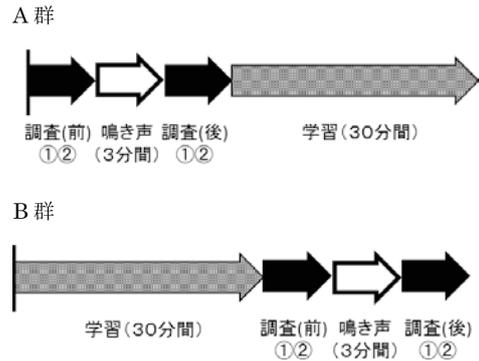


図1 タイムスケジュール

分析方法

データの集計および解析は、統計解析ソフトSPSS Ver. 15.0 for Windows 日本語版を使用し、統計的手法については Wilcoxon の符号付順位検定を用いた。

倫理的配慮

本研究は鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 2015-9)。

2. 結果

(1) 乳児の理解と世話体験がストレス度に及ぼす影響 (表1)

生体を感じているストレス度を唾液アミラーゼで測定した結果は、学習なしのA群では平均値は21.6 kIU/L から26.8 kIU/L に上昇、先に学習を終了したB群では泣き声を聞いた前、後で平均値は16.8 kIU/L から10.4 kIU/L に低下した(表1)。泣き声を聞く前のアミラーゼ値が高校生10名では平均32.7 kIU/L(6～61)、大学生11名では平均7.2 kIU/L(1～9)であり、高校生と大学生でストレス度が大きく違っていた。

(2) 乳児の理解と世話体験が子どもへのイメージ、育児姿勢に及ぼす影響 (表1)

対兒感情を泣き声の前後の平均値で見ると、接近点では、学習なしA群で31.7が30.1であり、学習後のB群で28.2が28.8であった。回避点の平均値の変化は、学習なしA群で8.9が12.8、学習後のB

表1 A群とB群におけるアミラーゼ値, 対児感情点数, 親性準備性点数の比較

		A群			B群			
		高校生	大学生	全体	高校生	大学生	全体	
対象数		5	6	11	5	5	10	
アミラーゼ値 (kIU/L)	前	39.8	6.5	21.6	25.6	8.0	16.8	
	後	52.0	5.8	26.8	14.8	6.0	10.4	
対児感情	接近	前	34.0	29.8	31.7	28.8	27.6	28.2
		後	35.0	27.0	30.1	29.2	28.4	28.8
	回避	前	10.0	8.0	8.9	6.8	18.0	12.4
		後	11.0	14.3	12.8	4.6	13.8	9.2
親性準備性点数	前	66.0	62.7	64.2	67.0	70.4	68.7	
	後	68.2	60.8	64.2	68.0	69.8	68.9	

P<0.05

群で12.4が9.2であった。B群での回避点は有意に低下していた (P<0.05), 親性準備性点数は両群でほとんど変化が見られなかった。

すべてが終了した際に, 自由記述で参加した感想を求めたところ, 肯定的な言葉を記述した者は21名中19名で, 「今までに無い経験ができて良かった」「育児に参加して素直な子に育てたい」「人形なのに愛着がわいた。かわいい」「赤ちゃんを見ると守らないといけないと思った」「大変だった。将来はいいパパになりたい」等であり, 肯定的とは言えない記述は「赤ちゃんは思ったより重かった」「おむつ交換が難しかった」であり, 参加者の終了時の表情は全員にこやかであった。

3. 考察

対象の高校3年生男子10名(年齢17~18才)と大学生11名(年齢18才), 合計21名で, 乳児の理解と世話体験がストレス度に及ぼす影響(表1)をみた。

生体を感じているストレス度を唾液中アミラーゼで測定した結果を前後で比較すると, 学習なしのA群の高校生で上昇, 大学生ではわずかに低下, 全体では上昇する傾向がみられた。先に学習を終了したB群では泣き声を聞いた後で, 高校生と大学

生で低下する傾向があった(表1)。

対児感情の接近点では, 学習なしA群で31.7が30.1であり, 学習後のB群で28.2が28.8であった。回避点では, 学習なしA群で8.9が12.8, 学習後のB群で12.4が9.2であり, B群での回避点は有意に低下していた (P<0.05)。親性準備性点数は両群でほとんど変化が見られなかった。

これらの結果から, 乳児の泣きについての知識と世話の方法を修得していると, 泣き声を聞いた際のストレスが少ない傾向があると推察した。子どもと接する体験の重要性が報告⁴⁾され, 家庭科教育等で学習の機会をつくる試みをしている学校があるが, 今回の学習は30分でできるので, さらに継続して検討したいと考えている。

子どもの虐待が問題になり, 対策が検討されて久しいが, 虐待は依然として増加し続けており, 身近なところでも事件が起こっている。虐待のハイリスクとしては障害など子ども側の因子, ステップファミリーや一人親など家族の問題, 社会の変化に起因する孤立などが知られており, ハイリスク群では早期からの支援が必要であることは言うまでもない。しかし, 一見普通の家庭の親でも育児不安の強い場合が多い。このような場合, 激高して叩くなどのしつけが行われ, 虐待が潜在している恐れがある。心身共に健全な次世代を育成するために, 親準備学習

のできる対策の普及が急務と考える。

謝辞

ご協力賜りました学校の諸先生，学生ならびに保護者の皆さまに深謝します。

尚，本研究は平成27年度 鳥取看護大学・鳥取短期大学 地域研究・活動推進事業助成金を受けて実施した。

本報告の限界 対象者が21名の男子であり，少ないことである。

引用・参考文献

- 1) 三瓶まり，前田隆子，福井典子「母性意識の程度とその形成要因～VAS調査用紙を用いて～」，『鳥取大学医療技術短期大学部紀要』30巻(1998)，pp. 39-43.
- 2) 花沢成一『母性心理学』，医学書院，1992，pp. 4-65.
- 3) 佐々木綾子「親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討」，『福井大学医学部研究雑誌』8巻1号(2007)，pp. 41-47.
- 4) 大日向雅美「赤ちゃんふれあい育児体験学習の効果」，『小児保健研究』59(2000)，pp. 172-174.